

京都六角町の町内と町内組織

——歴史的都心地区の近隣社会——

谷 口 浩 司

1 都市社会と近隣組織

1) 「平安建都1200年」の逆説

京都は第二次大戦でそれほど大きな空襲を受けず、戦災から免れることができた。その結果、歴史的な文化遺産である社寺仏閣だけでなく、戦前からの伝統的な町家の町並みが残されてきた。この町並みがもつ都市景観の構造は、木質系の建築で形成され¹⁾、いわゆる和風文化のきものの似合うまちのイメージをつくりあげてきた。戦後この町並みが残された背景には、上京や中京や下京の歴史的都心地区に集積した、織りに染めの職住一体になった伝統産業の力があったことはいまさらの論をまたない²⁾。しながら、生活様式の変化、世代の交替、大量生産大量消費といった時代の潮流の中で、伝統産業の後退は避けがたく、西陣などで「産地の空洞化」を引き起こした。町並みの解体化である。

都心にかかえた製造業の行き詰まり状態に覆いかぶさるようにして、「バブル経済」は京都を襲い、勢い伝統的な町並みの解体に拍車をかけた。マンションに象徴される建築の高層化が進んだのである³⁾。ロージの奥にニョキニョキと建つマンション風景の出現である。さらにバブル期の「再開発」に重なって1994年、京都は「建都1200年」を迎えた。京都では、この年を記念してさまざまな事業が行われたが、これらの事業の中には施設の更新として、JR 京都駅ビルの建て替えが含まれていた。従来からの

1) 谷直樹・増井正哉「都市祭礼に空間利用と演出―祭の舞台『町』空間」, 谷直樹・増井正哉編『まち祇園祭すまい―都市祭礼の現代』思文閣出版, 1994年, 154頁。

2) チェントロ・ストリコ研究会・代表三村浩史『歴史的都心地区における町家・町並みの保存と継承の具体策 (1) (2)』住宅総合研究財団, 1993年, 40頁。

3) 拙稿「分譲マンションにおける共同性の開発について」『社会学研究所紀要』第8号, 佛教大学社会学研究所, 1987年3月。紛争処理研究班「変貌する京都―中高層建築物建設ラッシュと町並み・景観問題』『調査と資料』第75号, 関西大学経済・政治研究所, 1991年。

高さ制限をはるかに超える高層建築は、京都の都市としての景観を構造的なところから変えていくような事態にちがいない。京都駅は、いわば京都の表玄関である。しかし、これまでの100年の総括とこれからの100年への展望が示されないままに、「建都1200年」の多分に曖昧なテーマ「伝統と創生」のもとに、京都駅ビルの建て替えは実行に移された。

西陣など伝統産業の後退の中で、「記念的建設事業」は京都経済の「活性化」への期待を担うものであったが、改めて京都の都市としての成り立ちについての論争を巻き起こした⁴⁾。歴史をつないでいこうとする多様な考え方や試みを呼び起こしたのであるが、その意義は小さくない。その点で「建都1200年」という時代の区切りは、逆説的であったといえるかもしれない。解体への力は同時に形成への力を喚起したのである。「バブル経済」の余韻はなおも続いているが、建築学や歴史学の成果のもとに、歴史的な都市の本来のありようもまた見直されつつある。

2) 町並みの背後にある近隣社会

京都は、建築学や都市計画の分野において画期的な動向を示していることが指摘されている。「東山座寧坂、祇園新橋、嵯峨鳥居本、上賀茂社家町、鞍馬、伏見などの歴史的な町並みが、あいついで重要伝統的建造物群保存地区に選定され、また選定されつつある。重要なことは、これがたんなる歴史的文化的遺産の保存を超えて、現代京都の機能と環境の再生をはかる計画構想—都市更新における地区修復および地区保存—として、すなわち、いわゆる『京都方式』として位置づけられていることであろう。ここには、歴史的都市の現代的課題として、豊かな歴史的遺産を活用しつつ、新たな都市空間を形成しようとする積極的な志向が明瞭に認められる」⁵⁾。これだけにとどまらない。歴史的界限景観指定地区として三条通地区、西陣地区や旧伏見市街などが美観地区として見直され、指定地域の拡大が行われつつあるのである。

では「現代京都の機能と環境の再生」とはどのようなことをいうのであろうか。建築物といったいわばハードな構造体は、家族やその連なりである地域での暮らしというソフトな社会体のあり方を規定し、かつ規定されてきたはずである。職と住が一体となることの中で形成されてきた歴史的な町並みは、職の解体化にさらされながらいかに住が生きながらえることができるのか。新たな秩序ある美しい建築環境は、おそ

4) 非常に多くのものが出版されているが、特に京都駅ビル問題では次に掲げるものが、総合的に問題を取り上げている。「特集・京都の景観問題Ⅱ」『建築ジャーナル』、企業組合建築ジャーナル、1991年7月号。

5) 高橋康夫『京都中世都市研究』、思文閣出版、1983年、3頁。

らく新たな秩序ある美しい社会環境と不可分であろう。したがって、もし歴史的な美しい町並みを形成していこうとすれば、歴史的な美しい人の関係、近隣社会を形成していこうとする日々の営みが欠かせないはずである。本稿は、こうした視点から、歴史的都心地区の近隣社会の今日的課題を解明しようするものである。

3) 歴史的都心地区の近隣社会をどうとらえるか

一般に都市化は個人の自立を促し、町内などの近隣社会での人間関係を希薄にするといわれてきた。とりわけ、町内会など地域のフォーマルな、自動加入的な集団にかわって、自発的な集団が多様に形成されていくと考えられてきた。アメリカの都市社会研究の基礎をなしたワースの学説の影響のもとで、日本でも広く支持されてきた考えである。なかでも奥田道大氏は中心的な位置を占めてきた。氏の見解では「地域ぐるみ的な町内会組織を地域との唯一の回路とする時代は、もはや終わった」⁶⁾ことになる。「町内会と行政とは組織的に相互に補完し合う関係にあり、行政にとって町内会は、『じょうご（漏斗）の口』とたとえられたことがあります。それは、行政の各組織系統が、『町内会』という口で一本化されて、地域に流されるとの意味でしょう。…行政側でもようやくこれまでの縦割りの組織系統を改めて、多様なコミュニティ活動の総合窓口としての『コミュニティ課』とか『コミュニティ推進本部』あるいは『地域行政課』などを新設する動きがでています」という。『『自発的』なクラブやサークル活動の多様化は、都市の成熟段階に見合って』いるが、これらの小集団に共通する魅力は、「個人としての生き方や価値観を比較的率直に反映できる点」にある。一方、「地域の伝統的組織としての町内会などでは、地域の居住者としての資格が、いわば自動的に町内会の会員としての資格に振り向けられることは、『自発的』という選択基準とはだいぶ隔たり」があるというわけである。町内会が唯一の回路ではなくなるとしても、その本来的役割が果たして小さくなっていくのだろうか。町内会には、「自動的」な中に「自発的」を含み込まざるをえないところがあるように見える。

確かに個人としての自由な生き方は、地域に依存しないさまざまな人の関係を形成していくにちがいない。しかし、だからといって生活場所を共有することの中で、互いに規定しあう関係を滑らかにこなしていくといった課題が無くなるわけではない⁷⁾。これは住むことに関わって生ずる不可避な課題であり、人が共同して生きてい

6) 奥田道大『都市型社会のコミュニティ』、勁草書房、1993年、166頁。

7) 安河内恵子「都市社会における集団参加とネットワーク形成」『都市問題』第86巻第9号、東京市政調査会、1995年9月は、このあたりの問題についてふれているが、必ずしもここでの論点と重ならない。

く存在であるかぎりにおいて無くなりはないものであろう。この住生活の課題解決を担ってきたのが町内会であり、自治会なのである。町内会が「地域ぐるみの」であるからといって、コミュニティと同義と見なすことは誤りであろう。それはあくまで、住を機縁とした目的組織、コミュニティ・アソシエーションなのである⁸⁾。町内と町内会は区別して捉えられなければならない⁹⁾。

日々の人の暮らしは、衣食住多様な欲求を満たしながら成り立っている。いわば人が人として生きていくための基礎的な欲求を人は誰でももっている。近隣社会は、人に共通するこれらの欲求を基礎に積み重ねられた、相互行為のまとまりである。この社会的なまとまりは全人格的である。したがって近隣社会は全人格的である。しかし町内会は全人格的なものでは決してない。それは目的的な組織（アソシエーション）であり、人の暮らしの部分でしかない。

近隣社会に基礎を置く組織、町内会は、もともと古いムラのものとして見られてきたし、むしろ都市社会は、ムラのものからの解放の上に成り立つといった見方が支配的であった。だがこんにち、町並みの混乱とそこからの脱出が求められつつある中で、近隣社会とそこに基礎を置く組織のあり方は焦眉の課題である。ここに都心地区室町の六角町を取り上げる所以がある。（ここでの近隣社会という用語は、コミュニティとほぼ同義語であるが、歴史的都心地区を扱ううえでコミュニティという用語はいかにともふさわしくない。しかし、都市コミュニティ論といった、交差文化的な社会学上の課題に関わっていることから、同義語として用いられていることを断っておきたい。）

2 社会的基礎組織

1) 近世町・町組の解体と再編成過程

京都が、近世都市から近代都市へ、さらに現代都市へと発達していく過程で、生活圏域が拡大していくことは自然なことであり、それに対応した行政機構が求められることも当然なことである。その過程で、生活圏域の中であって社会的基礎単位がどのように位置づけられてきたかは、現代都市社会の統合と自治のメカニズムを把握するうえで、基本的課題であろう。もしそこに何らかの変化が生じているとすれば、それ

8) 岩崎信彦「町内会をどのようにとらえるか」岩崎信彦他編『町内会の研究』御茶の水書房、1989年。

9) 拙稿「町内会自治の構造」佛教大学西陣地域研究会・谷口浩司編『変容する西陣の暮らしと町』法律文化社、1993年、73頁。

はなぜか、何をもって社会的基礎単位としうるか。行政がより上位組織に吸い上げたものの中に、直接的な近隣関係においてこそ実質的に遂行できることがそぎ落とされていくようなこともありはしないか。歴史の転換期における、現代町内会の母体となった町・町組について整理しておこう。

現代都市京都の町内会の母体となった近世京都の町・町組についての研究は、秋山國三氏編纂になる『公同沿革史』¹⁰⁾上巻に負うところが大きい。杉森哲也氏もまた秋山氏の業績に手掛かりを求めることから始めている。氏は、町（ちょう）は、近世社会における基本的社会集団であり、都市の基礎単位であるが、近代的行政機構の確立過程において解体していくと捉える¹¹⁾。町にかわって学区が都市の社会的基礎単位としての機能が与えられるわけである。

近世都市研究がこんにち、多くの成果をあげてきたのは、朝尾直弘氏の、町を「地縁的、職業的身分共同体」として規定したことに触発されて、町の独自の性格に主たる関心が向けられたことによると杉森氏はいう。しかし、町は「近世都市において単独で存在しているわけではなく、『町—町組—惣町』という重層構造を形成しており、その相互関係の中で存在している」と考えられる。成立期の町が「地縁的・職業的身分共同体」と規定されるのは、「小商人や商・手工業未分離の小経営を主体とするこの時期の町人にとって、町がその経営や生活を保証する唯一のよりどころであったからである。ところが、17世紀末以降、町屋敷売買・相続・債務弁済・公事訴訟などに関する町の保証機能が低下し、従来の町の性格が大きく変化することが明らかにされている。その最大の要因は、生産力の発展と社会的分業の進展によって、町人が町から自立化する傾向を強めたことにある。具体的には、仲間の成立・金融諸会所の成立を意味しており、町人にとって町はもはや絶対的な存在ではなくなった」からである。

明治元年、京都府は町組会所とともに小学校の設置に着手する。町組は番組に編成されるが、「番組はたんに町組の再編成によって成立したのではなく、従来の町の機能を吸収して成立」したのであり「番組体制確立政策とは、町に代わって番組を行政の基礎単位とすることなのであり、町組会所の成立と町会所の解体とは、番組の成立と近世町共同体の解体の一現象形態に他ならない」「学区がもつ強固な地縁性は、近世の町から引き継がれたのであり、これゆえ近代における基礎的な地域単位となりえたと評価される。そして、ここに学区成立の歴史的意義が求められる」と杉森氏はい

10) 秋山國三編『公同沿革史』上巻、元京都市公同組合連合会事務所、1944年。

11) 杉森哲也「町組と町」高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門Ⅱ』、東京大学出版会、1990年。

う。ここにおいて町一町組は、中世に成立し、近世に発展をとげ、近代において消滅をたどるとされる。学区がもつ強固な地縁性は、近世の町から引き継がれたものであって、そのために学区が近代都市京都の社会的基礎単位になったとしている。確かに、小学校建設とその維持に向けられた町組を単位とした市民的な力からすれば、いかにも町組＝学区が基礎単位であるが、その意味するところは行政機構上のことである。実質の生活ところでは、やはり町が基礎にあったのではなかったかというのがここでの論点である。「社会的基礎」の意味するところの社会学上の概念に関わる問題である。

近代京都において、町にかわって町組の機能が重要になった。京都府は、行政の基礎単位を、町からより広域で規模をそろえた地縁組織、番組へと再編成する。この番組が学区となり、地域社会の単位として機能していく。しかし、明治22年、京都市の成立はさらに学区から上京・下京の区役所にその機能を吸収してしまう。これに対して明治30年、学区域内の住民組織の再建が市議会へ建議される。「行政諸般ノ事務ヲ敏活」にする目的と合わせて、弱まった「隣保団結ノ実」「共同自治ノ基」の回復を目的として公同組合が設置される¹²⁾。ここで留意すべきは、公同組合の設置が行政からの意向というより、むしろ町、学区民の側からの働きかけであった点である。つまり居住を基礎とした近隣住民の組織化が「自治ノ基」として存在していることであり、町内の内実には他ならない。現在学区の統廃合が進められている。まぎれもない「歴史の転換点」といった事態である。近代から現代へ、「自立化した町人」を規律しうる社会組織とは何か。現代都市京都に連綿として存在する町内会が改めて問われる所以である。

2) 室町呉服問屋の特徴

六角町の位置する室町は、一般には京呉服の集散地問屋の町として知られる。西陣が先染の紋織物の「職人の町」であるのに対して、主にきものを商う「商人の町」として発達してきた。「京都の商人にとって、この室町かいわい、とりわけ中京あたりに居を構えているということは、単に商いに有利な場を確保しているということだけでなく、それ以上に、長い歴史の中で培われてきた町人文化の担い手としての誇りと、同時に責任をもたらされることになる」¹³⁾。室町は、京都の歴史的都心を形成してき

12) 益子庄次編『公同沿革史』下巻、元京都市公同組合連合会事務所、1943年、7頁。

13) 池村光敬・協力浜田徹「室町/ホコマチ」上田篤編『京町家・コミュニティ研究』鹿島出版会、1976年、222頁。

たところである。しかし、その地域的範囲については諸説があり、それほど明確なわけではない。概ね東は、東の洞院通から西は西の洞院通、北は二条通から南は松原通に囲まれた辺りである。行政区では、中京区、下京区にまたがっている。

東京、名古屋、大阪の繊維製品集散地には、「産地問屋から商品を仕入れ、全国の地方問屋に販売する前売問屋の集積が見られる」という。ところが京都室町の卸売業は、前売問屋、染加工問屋、白生地問屋といった「異なった機能を持つ3種類の専門問屋から構成され、分野ごとに整然とした棲み分けが行われてきており、全国の集散地卸との違いを際立たせている」ことに特徴が見いだされる¹⁴⁾。

室町では第一の卸売業は、「前売問屋と呼ばれる事業者が、集散地問屋としての機能を提供している。京都市という織呉服や染呉服の一大産地を控え、和装商品の手当と全国への販売に地の利を持つのは極く当然である。京都市の産品ばかりでなく、諸産地の和装製品も室町卸の手をとおして、主要消費市場に流される」。

第二の専門卸集団は、「京染京友禅業の存在と深い関わりを持つ。京染・京友禅業の経営形態の特徴は、受託加工にある。つまり、白生地の供給を受け、注文主の意向にしたがって染色加工を施すわけである。この白生地供給ルートは、悉皆業者を通して消費者から注文を請ける『誂友禅』と、染加工問屋からの注文を請ける『仕入友禅』に分けられる。『仕入友禅』の発注者である染加工問屋は、自らのリスク負担で生産に関わり、生産機能を分担する。染加工問屋は、室町卸売業の有力な構成員である。染加工問屋は、染め上がりの製品を前売問屋に卸すことから、仲間問屋とも呼称される」。

室町卸売業の第三の専門卸集団が白生地問屋である。「室町の染加工問屋は、染色加工用に白生地を手当する。染加工問屋のあるところ、白生地を産地から取り寄せ、染加工問屋に卸す業者も成立する」。

室町は、和装繊維製品の異なる専門問屋集団が階層的に分布し、各階層の卸問屋が集積するところに特徴があるとされている。この階層的卸構造が、室町卸売業の相互依存関係の基礎である。そのために、「友禅製品の不振は、染加工問屋、白生地問屋、前売問屋のすべてを直撃し、室町卸売業の打撃は三重にも増幅されて伝わる」。室町卸売業は、歴史を積み重ねることの中で練り上げられた京都の都市サブシステムである。「自立化した町人」は、この都市システムにあってなお相互に依存的である。システムの変動は容易ではない。伝統の厚みをもった地域社会が、その伝統の厚みゆえ

14) 『京都市繊維産業ビジョン』、京都市経済局、1991年、28頁。

に直面せざるをえない深刻な事態なのである。

3) 室町のハレとケ

鉾町と呼ばれる町内は、室町の中にあって祇園祭の山鉾巡行を行う町内である。鉾町は、龍池（22ヶ町）、明倫（27ヶ町）、本能（23ヶ町）、格致（28ヶ町）、成徳（27ヶ町）、豊園（29ヶ町）の6つの元学区にまたがっていて、合わせて156ヶ町ある。そのうち鉾町は35ヶ町（休み鉾3ヶ町）である。35鉾町の世帯数は、表1のように、多いところで105世帯、少ないところで1世帯、鉾町全体では1,099世帯である。人口は1960年の6,738人をピークに1990年には2,658人に減少している。

「祇園祭のハイライトは、華麗な装いをこらした山鉾の巡行とされる。しかし、巡行の前日に各町まちでおこなわれる『宵山飾り』も、京の伝統的な町並みのよさを満喫させ、訪れる人の眼を楽しませてくれる魅力的な行事である。宵山が近づくと、ふだみなれた町の風景は一変する。どの町でも、町のなかほどにある町会所のまえに山や鉾がたてられ、駒形提灯にあかりがともされる。町会所の座敷をのぞくと、山鉾のご神体や町内の宝物を一堂にならべた『会所飾り』がおこなわれ、さながら町の宝物を展示した美術館といった趣がある。このように宵山の山鉾町は、会所飾りによってハレの日の祭礼空間に変身するのである」¹⁵⁾。谷直樹・増井正哉編『まち祇園祭すまい—都市祭礼の現代—』は、現代都市にハレとして甦る歴史的空間についての詳細な調査研究の成果である。

きものの町京都は、精緻な都市システムをつくりあげてきた。西陣がきものを織り上げるところであるなら、室町は商いの地である。そして祇園は装いの町、和風京ものの総合展示場である。歴史的都市のシステムは祇園祭によって成就する。京の町の平安を願う、絢爛豪華な「織物ショウ」としての機能を兼ね合わせた祭礼として、歴史的都市のシステムを統合へ動機づける。それだけに現代に生きる祇園祭の歴史的都心地区における意義は深い。しかし、ハレは、圧倒的に長いケからすればほんの瞬時に過ぎない。その瞬時の喜びは、そこにつないでいこうとする日々の町内の営みがあればこそであろう。六角町においてケの町内、日々の町内をみることにしよう

15) 谷直樹「町会所と会所飾り」谷直樹・増井正哉編『前掲書』81頁。

3 現代町内組織と町内矛盾

1) 町内組織

イ) 町並みの構成

六角町は四条通よりも北側、烏丸通よりも西側にあつて、六角通と蛸薬師通にはさまれた南北の新町通に面した両側町である。学区では中京区の明倫学区になり、町についての古い文書も多く残された歴史のある町内である。1994年には、祇園祭に山鉦を出して640年を迎えている。この通りの一筋東側には室町通が走っている。都心地区のこの辺り一帯が室町と呼ばれていて、その中の室町通であり、現在、呉服卸業が新町通より室町通に多く、昔から室町の中心が室町通にあったように見える。ところが、かつては新町通の方に呉服商が多く、むしろ新町通が「おもて通り」であったといわれている¹⁶⁾。道路幅は現在でも新町通の方が広く、往時の名残として新町通に面して町内に住む人たちの意識の中に誇りとして潜在している。戦後に、繊維問屋が室町筋にいっそうシフトして建物のビル化が進み、その後の繊維不況とバブル景気による不動産投資で、町並みの変貌ぶりは新町通よりも室町通の方が激しい。

六角町には二つの大店、三井と松坂屋が江戸時代より店を構えた。西側北部に三井が延宝元年(1673)に呉服屋を開き、後に呉服商の発展にともなつて両替商を営んだ。その家屋敷は、戦後まで三井家のものであつた。敷地のかなりの部分が逓信病院建設用地として売却されることになり、地域に建設反対運動が起こつた。それは、昭和31年に結成された明倫学区自治連合会の「初仕事」となつた¹⁷⁾。明倫学区児童用プール及び児童公園用地として確保したい旨が三井家に伝えられたが、昭和33年郵政省に売却された。その後、時の総理大臣岸信介氏まで動かして郵政省に伝えられ、適当な代替地さえあれば郵政省取得の土地は、明倫学区に譲ることになったが、代替地の確保が進展しないまま交渉は打ち切られ、昭和35年逓信病院建設着工された。その結果は、「八棟造りの主屋と公家屋敷様の常盤殿は八坂神社に移されて残つたものの、子供心にある姿とはくらべようもなく、まして六角町の景観は格調を失っている」¹⁸⁾と六角町住人吉田孝次郎氏は表している。プールは、郵政省よりの借地として建設された。三井家の敷地の一部は現在、三井クラブとして残され、三井銀行などの社員の保養施設が町内に建てられている。

16) 池田光敬・協力浜田徹「前掲論文」234頁。

17) 『明倫史』第二篇、京都市立明倫小学校、1965年、153頁。

18) 吉田孝次郎「住み継ぐ」3(『文化の風土』261)、『京都新聞』1995年5月4日。

表1 鉾町の人口動態

	山 鉾	町	学区	80年			85年		
				世帯数	人口	男	世帯数	人口	男
中 京 区	鈴鹿山	場之町	龍池	4	8	3	49	56	22
	役行者山	役行者町	龍池	21	49	24	19	37	19
	孟宗山	笋町	明倫	4	5	3	2	2	1
	黒主山	烏帽子屋町	明倫	11	34	18	10	34	17
	鯉山	鯉山町	明倫	15	56	31	17	49	27
	山伏山	山伏山町	明倫	4	17	8	4	17	8
	菊水鉾	菊水鉾町	明倫	12	33	15	9	25	12
	八幡山	三条町	明倫	46	146	63	61	144	66
	北観音山	六角町	明倫	29	88	34	19	76	32
	南観音山	百足屋町	明倫	73	179	98	44	146	75
	放下鉾	小結棚町	明倫	29	85	42	29	72	36
	鷹山	衣棚町	明倫	15	53	23	13	51	24
	浄妙山	骨屋町	明倫	25	88	40	18	65	30
	橋弁慶山	橋弁慶町	明倫	13	30	12	10	29	11
	布袋山	姥柳町	明倫	20	63	29	21	63	30
	占出山	占出山町	明倫	24	68	33	16	47	28
	霰天神山	天神山町	明倫	14	39	19	9	30	13
	蟾螂山	蟾螂山町	本能	29	106	38	46	105	38
下 京 区	油天神山	風早町	格致	74	209	91	104	243	100
	太子山	太子山町	格致	52	147	64	41	120	54
	四条傘鉾	傘鉾町	格致	28	87	40	28	84	37
	戸刈山	芦刈山町	格致	44	161	80	33	134	61
	木賊山	木賊山町	格致	74	187	78	65	149	47
	鶏鉾	鶏鉾町	成徳	18	41	18	12	36	17
	白楽天山	白楽天町	成徳	24	56	32	36	84	40
	凱旋船鉾	四条町	成徳	44	130	62	48	120	51
	船鉾	船鉾町	成徳	32	101	43	30	82	37
	岩戸山	岩戸山町	成徳	34	118	57	38	88	37
	函谷鉾	函谷鉾町	成徳				1	1	1
	月鉾	月鉾町	成徳	21	69	33	17	48	22
	郭巨山	郭巨山町	成徳	23	81	40	25	72	36
	綾傘鉾	善長寺町	成徳	22	69	35	40	80	45
	伯牙山	矢田町	成徳	57	181	80	52	134	52
	保昌山	燈籠町	豊園	53	186	93	50	163	76
	長刀鉾	長刀鉾町	豊園	5	13	7	5	10	4
	総 計			993	2983	1386	1021	2696	1206

90年			高齢者率	持ち家率	90/80年人口増
世帯数	人口	男			
34	42	23	4.76	5.88	425.0
11	25	7	40.00	63.64	-49.0
					-100.0
7	24	10	20.83	75.00	-29.4
24	50	27	18.00	36.36	-10.7
3	14	7	0.00		-17.6
5	18	8	22.22	83.33	-45.5
67	146	66	25.34	38.81	0.0
21	64	24	28.13	80.95	-27.3
40	131	65	23.66	77.50	-26.8
28	66	30	37.88	35.71	-22.4
11	43	19	20.93	90.00	-18.9
18	55	26	20.00	77.78	-37.5
10	27	11	33.33	60.00	-10.0
20	57	29	15.79	45.00	-9.5
14	41	24	34.15	85.71	-39.7
17	46	22	19.57	47.06	17.9
20	44	16	29.55	50.00	-58.5
105	230	104	25.22	43.69	10.0
105	253	96	13.44	56.73	72.1
21	69	30	28.99	85.71	-20.7
32	113	52	17.70	56.25	-29.8
56	170	76	15.29	70.59	-9.1
7	18	9	16.67	50.00	-56.1
52	109	54	17.43	19.23	94.6
85	142	70	14.08	21.18	9.2
59	115	47	20.87	38.18	13.9
29	86	49	20.93	65.52	-27.1
1	1	1	0.00		
16	41	17	19.51	26.67	-40.6
16	46	21	36.96	46.67	-43.2
49	98	44	14.29	18.37	42.0
70	134	40	17.16	31.43	-26.0
44	138	61	21.74	63.41	-25.8
2	2	1	0.00		-84.6
1099	2658	1186	20.65	46.10	-10.9

東側中央部には、松坂屋が伝統的木造建築をそのまま残して京都事業所を置き、呉服仕入れ店舗として使用している。松坂屋は、延享2年（1745）、姉小路に呉服の京都仕入れ店を開店、その4年後に現在地に移った。この店舗は間口がかなり広く、楠絹織に借家として使われている北隣の町家（ちょういえ）とともに、町並み保全に影響を与えていると思われる。松坂屋のちょうど西側向かいの吉田邸は戦後、「洋館まがい」に改造されて貸店舗として使われていたものを、昭和53年賃貸契約解消とともに白生地染呉服を商った明治42年棟上げした総二階の母普請の「表屋造」に復元されている¹⁹⁾。

町内の世帯数は比較的少なく、会員数は27世帯である。町内は居住世帯だけではなく、非居住世帯や会社、貸店舗も町内会会員となっている。宅地割では42の地番を数えることができる。しかし、一軒で複数の土地家屋を所有しているケースなどによって、町内の実質世帯数は27世帯より会費が徴収されている。市政協力委員をとおして配布される市民新聞などは、26世帯として届けられている。

ロ）役員

町内は、幹事（町会長）、会計係、神事係の三役と呼ばれる役がある。これら27世帯から選挙で3人の役員を選ぶ。しかし、この3人は、世帯主が高齢であったり、女性であったりと種々の事情で引き受けることがかなわず、結局ここ何年間かは10人ほどの人たちの間で担われている。三役には、幹事系、会計係系、神事係系というように役柄が人柄、家柄、年齢などによって何とはなしに役に当たるものが決まって、その中でそれぞれに交替で当たるといようなことになっている。しかし近年転居などもあり、この順番もまた崩れてきているという。町内の高齢化が進んでいてしかも若者が少なく、役員は50歳代から60歳代である。

1月に新年会を兼ねて総会が行われる。3月が年度替わりで、順番からすると、次の年度の役は、誰になるか決まってくるので、予定として報告され、その後、日時を決めて投票が行われる。こうした投票はかなり古くから行われていたようである。役員になる人も限られ、隔年で当たるようなことになりかねずなかなか大変で、婦人でも役を引き受けてもらうようにしてはといった意見もでていたが、現在のところでは慣習によって男性の世帯主で当たっている。

京都市から委嘱される市政協力委員は、それまで行われてきた連絡員制度を廃して、

19) 吉田孝次郎「伝統様式の復元活用事業～吉田孝次郎の試み～」チェントロ・ストリコ研究会・代表三村浩史『前掲書』。

昭和28年より設けられた制度である。平成6年度より町内各世帯順番に全世帯回すことになった。前年度までは幹事（町会長）が兼務していたので、その役目としては、「格下げ」となったと解釈できるかもしれない。このことは、明倫学区の統廃合により、町内への帰属意識のシフトのような「気分」があるのではないか。

ハ) 町内会と山鉾保存会

祇園祭では北観音山が建てられ、巡行に加わるが、昭和41年に7月17日の前の祭りと24日の後の祭りが17日にいっしょに行われるようになるまでは、後の祭りの山鉾巡行のくじ取らずで、先頭を曳かれる山であり、格式を誇った。六角町では財団法人北観音山保存会が昭和35年3月に設立され、町会所・山鉾収蔵庫およびそれらの敷地が財団法人の所有となっている。祭りに関わる一町有財産を将来にわたって町内の世帯の移動などによって起こらないともかぎらない事故から、組織的に守っていくためであった。保存会は、町内に居住する世帯で構成されている。町内会と保存会の関係については、増井正哉氏の調査で明らかにされているように²⁰⁾、六角町では4つに分類された中の第2のタイプ、町内会に保存会が包摂されるタイプであるとされていて、私たちの町内の調査でも確認されたが、それはかなり建前上のことで、保存会と町内会はいっしょで、祭りは町内一体となって行われる行事として意識されている。しかし、役員は理事長、理事2名、監査2名、評議員6名で、すべて町内在住者から選任されることになっている。財団の収入は町家の家賃35万円／月（ただし7月は祇園祭で町家を使うため半額の17万5,000円）である。これに行政からの助成金で祭りが運営されている。町内会会計とは別立てである。

ニ) 町費の徴収

かつて町費は間口割で行われてきたが、町内にビルの建った戦後高度成長期あたりに、容積割に改められた。月額にして1,000円から6,000円で、世帯あたり平均3,000円程度といったところである。借家になっている場合には、家主と借家人の両方から町費が収められるようになっている。徴収された町費は、祇園祭以外の町内行事の寄り合いの経費に当てられる。

20) 増井正哉「まち祭住まい—都市祭礼の社会的基盤・空間的基盤—」谷直樹・増井正哉編『前掲書』177頁。

ホ) 町内行事

町内会は、自治会ともよばれる住民の自治組織である。その活動は、一般的には防犯、防火活動、清掃・美化活動、親睦、町内安全祈願など居住に関わって生ずる事柄である。市の広報などの市政補助業務もあるが、形式的には町内行事とは区別されている。六角町の公式町内行事は、新年祭飾り付け（1月）、新年会（1月）、春季彼岸会（3月21日）、祇園祭（7月）、秋期彼岸会（9月24日）、八坂神社お千度（11月3日）、天照皇大神お火焚祭（11月15日以降）の行事が行われている。町家の裏庭に山鉾を収納する土蔵と揚柳観音を祀った観音堂があり、毎月の一日に月事祭があるが、これは町家を借りている楠絹織が榊とロウソクをあげるよう任されている。これらの行事は毎年、型どおりに行われている。

2) 町内意識と行動

祇園祭は町内のあり方に有形無形の作用を及ぼしている。祭りはハレの日であるが、一年を通じておもて通りの町空間およびそこにおけるつきあいに、適度の緊張を与えているように思える。以下は、吉田孝次郎氏への聞き取り調査をもとにして「町内意識」についての記述である。吉田氏の町内での意識と行動は、自らの町家の復元や祇園祭への思いに示されているように、伝統的な様式、作法をできるかぎり守っていかうとするものである。六角町をわが町とする喜びが「町内の口には言えない気分」として語られる。

町内の「ケ」の中の緊張感

突如として、7月にボッとハレの日を迎えるような印象をお受けになるかもしれませんが、我々の町内としては、祭りが終わったその日から一年先の祭りにそなえる。ケの部分がうんと長いわけですが、個々の家族やそれが営む仕事も、何らかのかたちで、祭りがうまくいくように、「歯止め」といいますか「戒め」といいますか、絶えず町内に緊張感を与えています。個々人は自由に振る舞っているわけですが、その根のどこかで町内にふさわしい自分たちの立ち振る舞い、それは商いを含めてですが、そういうことが土着化しているんです。

この町に住まわしていただいている喜び

この町内の祭りは観音さんですけども、ずっと心のより所にしてきたわけですね。祭りというのは、7月の一週間とっておられるかもしれないけれども、観音さ

んには春秋のお彼岸の祭り、11月のお火焚き、新年のお飾り。毎月の一日の月事祭。非常にシンボリックなものです。山鉾よりも町内に長く祀られている観音さんを、祭りのときには鉾の上へのせるわけですけど、何ていうたらいいのかなあ、適当な言葉は見つかりませんが、今自分たちだけがこの町内に生きているのではない、やっぱり過去からずっと続いてこの町内に住まわしていただいている喜びていいですか、安心感ていいですか、そういうものに何物にもかえがたいものを感じているんです。あえていえば、ハレの場へかつぎ出す祭りということになるでしょうね。この町内ではチマキを売ったりもしませんし、観音さんをしかるべきところに飾って、これもなかば非公開のような状態ですが、その前に立派な北観音山ていうのが建ちあがって、そこに懸装している飾りもんやなんか、それらに対する誇りといいますか、ウチは立派や、立派にしなきゃならない、というようなものです。誇れるようなものをもっているというところで、何となしに納得する。その何となしを条件を絶えず整えるべく各人は心掛けてるように思います。

気分としての町法度

箇条書にはなっていません。江戸時代には箇条書になっておったわけですね。明治になって明治の町法度をつくるとか、昭和の町法度みたいなものをつくろうということは、一切なかったですね。あったのは江戸時代に二度ほどつくりかえていますけども。廃れたようなものや、新しく加わったような条件も含めて、何となくずっと引っ張ってきていますね。「何となく」を即座に了解しうる、そういう気分ていうか、ま条文ではないんですから、気分としかいいようがないんですけど。それは、京都市の条例などよりも、心根の中に深く定着しておって、よそ様の町内には言うようなものではないですが、この町内を仕切っていくときには、そういうものを持ち出すのが一番穏やかでなおかつ説得力をもつように思いますね。

行き詰まる呉服商

この界限での呉服商ていうのが、まあ全体的な家業ですよ。そういう家業からリタイアしてしまった家族、私の家もそうですが、そういうものと、呉服商を看板に掲げて今も現役で仕事をしておられる人たち。それからサラリーマン。さらに向かいの松坂屋なんかは、江戸の中期からおるわけですが、今やもう、採算を

度外視して、松坂屋というイメージを守るために経済的には非常に率の悪い、こういう店構えでやっておると。一方には、経済的に下降線をたどりながら何とかその建物の美しさを保守していこうという立場と、その商売をうんと、勢いよくするには床面積を増やして、人もどんどん入れて、商売に便するような建物を建てるという立場とが、今半ば拮抗しているんじゃないでしょうか。

ここのちょうど東の室町通、鯉山町ていうんですが、そこはまあ現役の呉服商がこの町内より多い。けれどももう呉服商ていうのが成り立たんで、浜学園ていうような現代を象徴するような予備校ができて、大きな看板をたてて、それはもう美しさということと全く無関係な。衰えたといえどもそうはなりたくないという、町内の希望はあるんです。それはあるんですけど、先行き呉服商というものが今全体的にへったてるといことはご承知のとおりですけども、これがウント賑やかな商いをしていく場合に、果たしてこういった店舗で十分な商いができるかどうかという、これは理に反することなんです。ていうのは、かつてこういう店舗は明治期にでき、受注生産で成り立っておった呉服商でしょう。それが戦後、ほとんどが見込み生産に切り替わってしまった。呉服商を考える場合、こういった店舗で大きな商いをするていうのは、不可能ですわ。そういう観点でこの家を天秤にかければ、もう死に体なんです。でそういうところに向けて、それがもったいないからこれを再利用している商いがどういうモノかという、まあ小売業。商い単価の低い佃煮屋とか料理屋のようなもの、絶えず一般大衆がそこで物を求めるような商売に切り替わっていく。そうした場合、こうした建物の再利用が可能になってくる。

松坂屋の向かいどおし並び、隣にあんのが昭和10年代の一番新しい町家の再生タイプでやっぱしこの辺りにはふさわしい。バランスがとれているわけですね。昭和30年代以降の高度経済成長の波にのって、大きく商いを展開しようとして建った山田さんのビルなんかバランスも悪い。じゃあ町内で共通点を探していけば、やっぱり祭りに対する情熱とか家族の人柄とか、そういう点で違和感がないから共存できるわけなんです。山田さんも戦前からお住まいなんです、これが新しい資本をもって、ボンと入って来られたら、そらやっぱりそんなにうまくいかなだろうと思いますよ。かろじてバランスしているのは、祭りという大きな共通項に対する認識で、多少美観を越えて、町内の融和がはかられている。

楠さんとこは町有財産で、ここの隣と同じように昭和10年代の再生タイプの町家なんです。ご当主は、ああいうものが美しく、なおかつ現代に機能すると思っ

ておられるんで、家賃を払って頑張ってくれておられるわけですね。これも一つの手本になっているわけです。

3) 六角町の困難

イ) 企業の顔

町内に所在する家業経営が企業経営へと移行しようとする力に対して、町内の示しうる制御の力をどのように見積もるかは微妙である。そのことは、大店であった三井と松坂屋のとった六角町での選択に示されている。両者のとった行動は、まったく異なっていた。瀟洒な社員保養施設として一部残されているとはいえ、三井の敷地の大部分は郵政省に譲渡されて、高層の近代的病院に姿を変えてしまったが、これに対して松坂屋は、伝統的な町家のままに仕入れ店舗として使用されている。もちろんもとの利用の形態が違うとはいえ、この差は何によるのか。

近代企業の選択行動は、費用と利益のバランスに依存する。大企業であれば、顔も六角町には無いに等しい。経営効率からすれば、松坂屋の選択は他にいくらかでもありうるはずである。松坂屋にとって、町内の「希望」が費用と利益のバランスをクリアさせているのかもしれない。そこにはまだ幾分か松坂屋の顔が六角町に対して向けられているとの解釈もまた成り立つかもしれない。

高齢化によって忍び寄る世代の交替、後継者の不在、呉服産業の見通しへの不安、バブルで高騰した土地の相続税問題と、歴史的都心六角町の町並みの不安材料は多い。

ロ) 転入者の受容

世帯の転出転入は、この室町界限では経営の浮沈によって激しいと一般的には言われている。創業者一世代で交替していくというのがむしろ自然で、同じところに三代住み続けることの方がむしろ不自然なくらいだと言われる。だから室町の気風は「ドライで、郷愁みたいなものは一切もたない」のがこの辺りの特性だとも言われたりする。しかし、六角町で見るかぎり、必ずしもそうではない。江戸期から続く家は例外としても、100年以上続いた家が6軒と、鉾町の中で一番多いことに現れている。この歴史の重みとドライさは時として軋轢を生む。

企業家の交替によって新しいエネルギーが町内に入ってくることは、祭りを支える力としても歓迎される。六角町の「格式」は、呉服卸業にとっても決してマイナスではない。むしろ「格式の難しさ」はあるものの、憧れの土地でさえあるだろう。

呉服卸業を営むA氏は、父親の染色業を継いだ後、順調な経営で六角町に土地と建

物を求めて転入した。10年余り前のことである。祇園祭に関わることの「怖さ」も周囲から多少耳にしていたが、六角町に店を構えることの利点も大いにあった。何より積極的な経営姿勢としての誇りがあった。転入と同時に祭りを支えるための「資格取得」に必要な費用負担を行い、やがて何年か後に町内の役も回ってくるようになった。けれどもそのやり方が町内の古くからの役員には、どこか「違和感」を抱かせたようだ。A氏にとっては何もかも未経験の「歴史的都心」六角町の作法であったのだからたまらない。いささかの経営者としての誇りからすれば、多少大目に見られてもいいのではないかと、といった思いにかられたとしても当然ではなかろうか。しかし、A氏にとって、町内会の役職者の目は厳しく、「新しいエネルギー」として歓迎されているようには思えなかった。T氏は、町内の役に関わることを辞退したのである。旧住民にはその行動が唐突に感じられるようなものであった。その後、A氏の家で葬儀があり、町内では、慣例にしたがって世話をすることになったが、気まずい関係が続いている。「Aさんいつまで意地はってんの」という町内の声もあるし、こうした軋轢は、「時が自然に解決してくれます」といった役員の自信も聞こえる。

ハ) ワンルームマンション問題

1994年の夏に、町内に古くから居住するB家の前にワンルームマンション建築確認の「看板」が表示された。町内の役員には、これは困ったことになったと感じた人が何人かいた。そこで町内の役員で相談し、なんとか建設を取りやめてもらうように町内会で話し合いをもつことにした。

B家は、古くからの呉服商であったが現在は営まれていなくて、表の間が改造されて呉服関係の店舗として貸されている旧家である。家族内での後継者がいなくて、親類から跡継ぎを迎えることになっている。将来の相続に備えて、相続人がワンルームマンションを建設することにしたということであった。土地の効率的な利用から、ワンルームマンションには18戸の居室をもつ建設計画であった。

町内会での話し合いの場で出された意見は、「町内が27戸でしかないところにもってきて、いきなり18戸の、しかもファミリータイプではないワンルームのマンションが建てば、町内の運営に支障をきたしかねない。個人の財産の運用は、個人に帰するし、その建物の容積率などが京都市の条例にふれなければ当然これは、個人の権利としてその企てにクレームをつけるような権限はない。けれども、長年培ってきた祭りの運営の習慣にてらして、突如として27戸の中に18戸という新しい住民が加わってきた場合に、町内でのいろいろの決め事に支障をきたしかねない。B家は江戸時代からこ

こに住まいし、お父さんは、現在の町内役員に祭りの作法をきちんと教えた人ではないか」というような内容であった。六角町の習慣など熟知している家柄であり、役員もまた自分たちの代には決して同様なことはしないと申し合わせることによってワンルームマンションは建たないことになった。

町並みの景観ということもなくはなかったが、祭りに支障をきたすといった筋の立て方が納得への近道であったのである。「景観というのは非常に曖昧な、各人のその価値判断にまかされるようなこともあるんで、町内全体の意志をまとめるためには、景観程度のことはとてもまとまらない問題であったと思います。人の思いはさまざまなんです。景観と考えている人もいるでしょう。軒を接している隣近所にしてみれば日照権やとか工事にともなう問題とかあるんですが、南北と奥にいる人達だけの問題で、とても全体の問題にはなりきらなかった」と吉田氏は、町内に起こったマンション問題を振り返って語る。

職住一体の町室町において、家業経営から企業経営へと自立化を強めた「町人」と同様に、経営から退いた「町人」もまた、町内での連続的、調和的な住生活を維持しうることはなかなか難しい。歴史的都心地区の多くの町内がそうした事態にさらされている。けれども六角町の変化は緩やかである。それは、祇園祭が「町内の祭り」として機能していることの現れである。この機能は内在的規制力であって、「祭を滞りなく行ふ」という言葉に思いが込められている。この規制力は、希望と失望の交差した、きわめて「淡い」ものでしかない。個人の財産権の行使が原則的に自由であるとする観念のもとに、近隣社会が混乱に陥らざるをえない事態を、近隣の倫理とでも言えるような「淡い自己規制」に委ねるだけでは、あまりにも近隣社会に酷ではなからうか。都市計画や建築基準法がもっとその土地に見合ったきめ細かなものとして機能し、町並みの風景が豊かな職を育てるものでなければならぬまい。これは政治的な課題である。